

8月28日の台風災害

四国災害アーカイブスには過去に四国で発生した災害情報が収録されていますので、ある特定の日の四国各地の様子を広域的に知ることができます。今回は、四国全体で死者が千人を超える被害が出た明治32年（1899）8月28日の台風を取り上げます。

この台風は九州東岸をかすめて高知県宿毛付近に上陸、四国を北東方向に縦断し、高知県では死者36人、家屋全壊2,064戸等の被害が出ました。（「高知県災害異誌」1966年による。別の被害記録もあります。）「中村町風水害史」（1938年）によると、中村町（現四万十市）では28日午後6時に暴風となり、風の勢いが激しく「如何に強健なる壮者も殆んど通行する能はず、積小石の如き恰も豆を投ずるが如し」と記されています。高知城天守閣のシャチや高知測候所の風力計が飛び、浦戸湾内の帆船が数隻沈没し、五台山竹林寺の五重塔が倒れたとの記録も見られますので、よほどの強風が吹いたものと推察されます。

愛媛県では、宇摩・新居郡で大きな被害が発生しました。「愛媛県警察史第1巻」（1973年）によると、宇摩郡別子山村（現新居浜市）では足谷川流域で山崩れが発生し、死者1,000余人、家屋の埋没等500戸以上に及ぶ惨状を呈し、新居郡では加茂川の氾濫により溺死者51人、国領川の堤防決壊により溺死者100余人等の被害を出し、明治期の愛媛県の災害の中では最大の人的被害を記録しました。このうち、別子銅山の状況について、「別子山村史」（1981年）では、28日午後8時半頃に暴風雨が最高潮に達して、全山が山津波の状態となり、風呂屋谷、見花谷及び小足谷の従業員住宅をはじめ、製錬所などが一大音響とともに崩壊、谷間に流失し、死者513人、家屋倒壊122戸等の被害が出たと記されています。

香川県では、被害が県中部の内陸部に集中し、死者307人、行方不明10人、家屋の全壊7,015戸等の被害となりました。（「香川県気象災害誌」1966年）最大風速は多度津測候所で52m/秒を観測し、死者のほとんどは家屋倒壊による圧死でした。また、「新修仁尾町誌」（1984年）によると、愛媛県別子山村などで濁流とともに押し流された人々の多くは銅山川から吉野川へ流されましたが、一部は国領川から瀬戸内海へ流れ出て、数日後、流木などの漂流物とともに33人の遺体が仁尾の浜に打ち上げられました。これらの遺体は仁尾の人々によって南の墓地に埋葬され、三回忌に供養塔「溺死三十三霊之塔」が建立され、毎年供養が行われてきました。

徳島県では、他県に比べると県全体では台風による影響は少なく、「徳島県災異誌」（1962年）には幸い本県は剣山周辺の雨量が200ミリを越えたものの、平野部では100ミリ以下で、風も大したことがなかったと記されています。しかし、「山城谷村史全」（1919年）によると、県西部の山城谷村（現三好市）では、28日には「暴風吹き荒び、大雨車軸を流すか如く」となり、伊予川などの増水は平時には想像できないほどであったことが記されています。山城谷村の被害は山岳崩壊3箇所、耕地の浸水20町、潰家47戸、圧死人1人等に及びました。また、この時、愛媛県の別子銅山関係者の屍が伊予川に流れ来て、磧に打ち上げられたり、埋もれるなど悲惨を極めるとともに、銅山の鉱毒が一時流下したため、吉野川では鉱毒が脇町下流にまで及び、河魚が全滅する被害も出ました。

特定の災害時に四国各地がどのような様子であったかを調べることにより、災害の範囲や規模、地域による被害の違い、災害を通じた地域のつながりなどを知ることができます。